

第Ⅴ部

歩みの事例編

05

12章 ライフステージに応じた支援をつなごう

多くの方が連携の大切さを口にしますが、「十分に連携できている」という声を聞くことは、残念ながらあまりありません。それは、連携によって地域ネットワークを作っていくという意識、視点が希薄であり、共通する子どもについての一時的な情報の伝達と共有、支援内容の調整のみが行われているからかもしれません。

地域ネットワークが充実していれば、子ども、保護者が、どの「入り口」へ相談に行っても必要な所へつながり、適切な支援が受けられます。

幼稚園・保育所時代は、発達障害の可能性のある子どもにとっては、ライフステージの「はじめの1歩」にあたる重要な時です。

第5部では、「個別の教育支援計画」等をツールとして、幼稚園・小・中・高等学校（特別支援学校）と引き継がれ、就学時から卒業後までのそれぞれの段階（ライフステージ）で行った支援をつなぎながら、取組を継続していった事例を掲載しました。つながり続ける必要性と、その効果がわかります。

早期相談・早期支援のポイント

早く、上手に、つながり続ける



事例1

Aちゃん

年齢：4歳（年中）

性別：男

診断名：自閉症スペクトラム障害

利用機関：公立幼稚園・市の子ども発達支援センター・体操教室

診断まで

Aちゃんは、小柄で穏やかな顔つきの、かわいらしい子どもです。言葉の遅れと、欲しい物に固執してスーパーでも大声で泣くことを心配して、3歳児健診のときにお母さんが保健師に相談しました。保健師からは市内の医療機関を紹介され、そこで医師から自閉症スペクトラム障害という診断を受けました。

支援の開始

お母さんは、診断名と家庭での様子を園に伝えました。園でも先生たちが工夫し、言葉を理解しにくいAちゃんのために、写真カードを見せながら指示を伝えるようにしました。保健師からは市の子ども発達支援センターの利用も勧められ、お母さんは市役所に行って手続きをし、週2回の集団療育と月1回の言語訓練を受けることになりました。

また、体の使い方もぎこちなかったため、近所でやっている子ども向けの体操教室にも通い始めました。Aちゃんは音楽に合わせて体を動かすことが大好きなようで、不器用ながらもとても楽しそうです。

支援機関同士の連携

幼稚園での写真カードを使っての指示は、初めはうまくいくように思いましたが、Aちゃんの動き出しは他の子どもたちより一足遅いままでした。先生の指示がまだよくわからないようです。お母さんによると、子ども発達支援センターではスムーズに動いているということだったので、先生は子ども発達支援センターにAちゃんの様子を見に行ってみることにしました。子ども発達支援センターでは、写真ではなく絵カードを使い、その場の指示だけではなく、活動全体の流れを絵入りのスケジュールで示していました。先生はさっそく同じような絵カードやスケジュールを作り、園でも試してみたところ、Aちゃんは生き生きとした表情でスムーズに活動に参加するようになりました。同じ頃、体操教室でも言葉による指示の理解が難しくなっていました。先生は以前研修で知った、「サポートブック」のアイディアを参考にして「Aちゃんノート」を作り、うまくいった支援について写真付きでノートに記入し、お母さんを通じて体操教室の先生にも見てもらうことにしました。写真付きのノートは体操教室の先生たちにも好評で、使えるものを体操教室でも使ってもらうことになりました。

言葉の遅れはまだありますが、今では先生の指示を理解し、Aちゃんは楽しく園生活を送っています。

＜保護者の声＞

園の先生が直接子ども発達センターに見に行ってくれて、センターと同じカードやスケジュールを作ってくれたので、Aもすごくわかりやすかったみたいです。

園やセンター、体操教室など、それぞれの場所でAの様子や支援方法を初めから話すのが大変でした。「Aちゃんノート」のおかげで、私の負担もだいぶ減って助かっています。いろんな場所で同じように接してもらおうと、こんなにも子どもの表情が変わるんですね。





事例2

「個別の支援計画」の活用によって、
強みを生かしながら楽しく生活できたB君の事例

B君との出会い

B君が入園してきたのは、1歳を迎える3月の頃でした。B君は、出生時にいくつかの異常が見つかり、3ヶ月に一度NICUフォロー外来に通っており、多様なタイプの子どもの受け入れを積極的に行っているという本園の評判を聞いて、入園をして来たのです。B君は、入園初日から、お母さんの後追いをすることもなく、保育士の手に残られ、保育園生活がスタートしました。

しばらくして、B君は、1歳6ヶ月健診で発語が少ないとの指摘を受けました。戸惑うお母さんに、お姑さんは少しも動じず、「男の子は、言葉がでるのは遅いもの。そのうちに、うるさいくらい、しゃべるようになるから大丈夫」と、一蹴したそうです。「確かに、個人差なのかもしれない」と、その時はお母さんも思ったようですが、何せ、初めての子育てということもあり、とても心配で、保育士にこのことを相談してきました。

B君の担任は、ベテランの保育士で、日頃の生活の様子をみて、B君には、言葉の遅れのほかに、ちょっと気になることがあると、お母さんに伝えました。



そういえばB君は…

- ・好き嫌いが、かなり激しいわ。
 - ・欲しいものがあっても、決して自分の手で取ろうとはせず、いつも誰かの手を運んでいくのよね。
 - ・晴れた日の外遊びでは、自分の影をじっと見ながら、その影との並走をずっと続けているわ。
 - ・抱っこすると、ぐっと反り返り、身体をあずけようとはしないの。
 - ・おもちゃを床に打ちつけて、その音ばかりずっと聞いていたり、急に火がついたように奇声をあげて泣き出してしまったり・・・。
- ちょっと、気になっていたの…。

経 過

— 連絡用の記録メモから「個別の支援計画」活用へ —

2歳

- ・フォローアップ外来は、半年に一回となったが、3ヶ月に1回を目安に、園と家庭とそれぞれで記録したものを交換し、B君の状態について共通理解を図る。

3歳

- ・3歳児健診で「発達のバランスが悪い」との指摘を受ける
- ・言語療法士とのリハビリを（月1回）すすめていく。その際、これまでの家庭と園との記録を「個別の支援計画」としてまとめ、持参する。

3歳

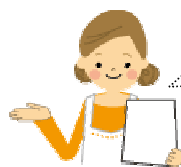
- ・言語療法士が、園でのB君の様子を見るために来園。
- ・園・家庭・医療の三者で支援を考える。

4歳

- ・年少児クラスにおいて、友だちとのかかわりの距離感が持てないことや、行事の時に落ち着いて取り組むことが難しく、次の行動への不安感が強くなってきたため、市の療育相談を受け、場面毎の対応についてアドバイスを受ける。

5歳

- ・0歳児から複数担任で関わってきたが、B君に対する支援を継続的に行えることや、保護者との信頼関係の構築等のために、常に誰か一人が、持ち上がって担任をするという体制を整える。



B君が好きなこと、得意なこと、それから、「こうしたらうまくいった」という秘策も記入しました。

※担当医には、その都度、家庭・園でのB君の様子を書き出したものを見てもらい、かかわり方についてアドバイスをいただく。



- ① 指示や手順をカードや図等を使って、視覚的に提示する。
- ② 指示する時には、短い言葉で明確に伝える。
- ③ 始めと終わりを明確にする。
- ④ 大人とのかかわりから信頼関係を築き、「いっしょ」に体験する機会を意図的に設ける。
例：読み聞かせの機会や、本児の好きな積み木あそびの中で「〇〇だね」とのおしゃべりを楽しむ。
- ⑤ 友だちとのやりとりでは、必要に応じて、大人が気持ちを代弁し、かかわりをつなぐようにする。
例：言葉で伝えにくい場合は、*「ヘルプカード」を使うことを練習する。
(※実態に応じて写真や絵を用いたカードで言葉を補うように提示する)
- ⑥ 好きなこと、得意なことを活動にうまく取り入れて、多くの体験を促す。できたらほめる。

※小学校入学を控え、大きな環境の変化による「混乱」を少しでも軽減できるように、特別支援コーディネーターと「個別の支援計画」をもとにB君の小学校生活を具体的に検討。園での様子も参観していただくなど具体的にB君の支援の引き継ぎをすすめている。B君は、すでに小学校見学もし、来校の際には、「〇〇くん、こんにちは」と職員から声をかけられたりもした。

成 果

- ・ B君にとってのかかわり方のコツは、周囲の園児達にも効果的であり、B君を取り巻く仲間の成長も自然と促す結果となりました。「クラスの中のB君」という仲間としての受け入れもスムーズになり、B君のことを彼らなりに理解し、仲良くしたり、手助けしたりする姿が見られるようになりました。
- ・ 「個別の支援計画」を作成し、定期的、または必要に応じて開かれた支援会議には、言語療法士、療育相談の巡回訪問の先生にも参加いただき、客観的にB君の実態を確認し、支援の具体的方法を考えることができました。
- ・ これまでは、B君が友だちとのかかわりがうまくいかず、パニックを起こした時、どうしたらよいか戸惑っていた職員も、今では、わかりやすい言葉で友だちとのかかわりを伝えたり、自分の気持ちを言葉にできるように促したりする等、適宜、視覚的支援を活用してB君の行動理解をサポートすることができるようになりました。最近では、トラブルが減り、笑顔で友だちの輪の中にいるB君を見る機会が増えました。
- ・ 支援を必要としている園児に対して「チームで支援する」という体制が整い、すべての保育場面において、新人・ベテラン保育士が一丸となって指導にあたる事が日常的にできるようになりました。
- ・ 保護者との面談の際には、具体的な支援の方策を提示することができ、家庭でできること、園ですべきことをしっかりと確認することができ、B君のその時の姿をそのまま受け入れながら、楽しい園生活を提供することができました。
- ・ 家庭では、保育士からの引き継ぎをうけて、同じように視覚的支援を取り入れたり、一日の園での様子を振り返る時間を設けたりしました。また、親子でゆっくり絵本の読み聞かせを楽しむ時間も設けました。



＜B君の声＞ ぼくの苦手なところを、みんなが早くからわかってくれたんだね。ありがとう。ぼくには「ヘルプカード」があるから、みんなといっしょに何でもできる。やり方さえ、わかれば何でもできるんだ。ちょっと、時間はかかるけどね。それから、ぼくの記憶力はすごい！って、みんながほめてくれるよ。これからも、もっとたくさんの方に挑戦してみたいなあ。



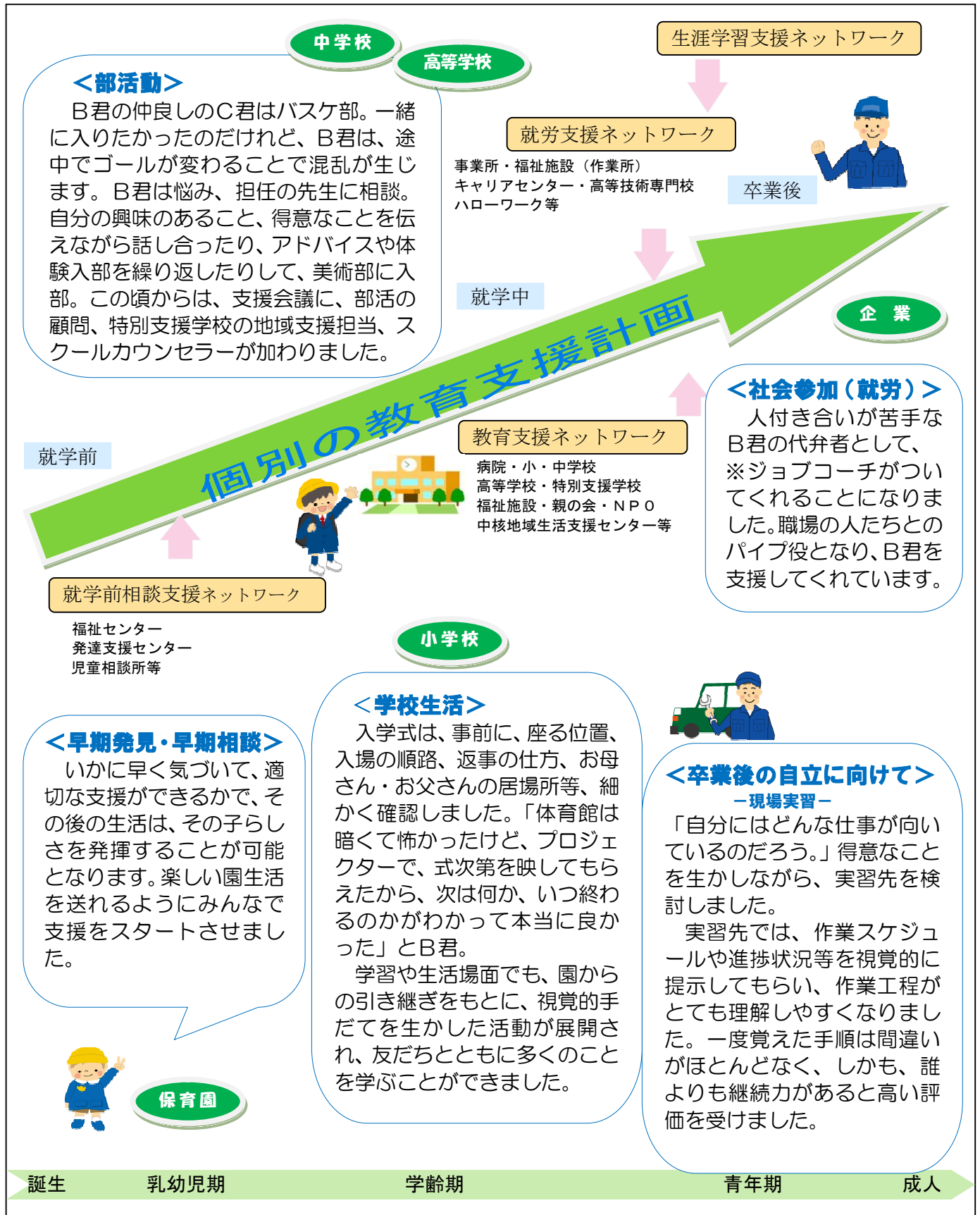
＜保護者の声＞ 忙しい中の記録のやりとり。ありがとうございました。「こうしたらできる」というヒントをたくさんいただき、息子もどんどん成長できました。また、成長の節目での引き継ぎの際には、「〇〇くんとかかわりのコツ」として、先生方全員で受け止めていただけたおかげで、環境のギャップにも戸惑うことなく生活できました。次はどんなことに取り組んでいく姿がみられるかと考えると、今からとても楽しみです。

ライフステージに応じた支援とネットワーク

「個別の教育支援計画」で支援をつなげていきましょう。

※幼稚園教育要領、小学校、中学校及び高等学校の学習指導要領では、支援を必要とする幼児児童生徒等に「個別の教育支援計画」を作成することが示されています。

【参考：B君の事例】



※ジョブコーチとは：障害者が一般の職場で就労するにあたり、障害者・事業主および当該障害者の家族に対して、障害者の職場適応に向けたきめ細かな人的支援を提供する専門職を指します。